# 3. 復興支援ボランティア事業

復興支援ボランティアスタディツアー
「桜プロジェクト３」参加レポートより

私がこのツアーに参加した理由は、私のお母さんの実家が岩手県一関市で、私の生まれも一関でした。被災後、道が復旧するようになってから帰り、祖父と祖母へ会いに行きました。家の中は、お風呂場のタイルは全て落ちて無くなって、停電しているため真っ暗で、水もでない、火もおこせない、そんな状態でした。気仙沼市へ行ってみると、まるで何事もなかったかのような穏やかな風が吹いており、しかし下に落ちている物はがれき、マンションの上には船が乗っていて、まるで人が住んでいたようには思えない程、私は衝撃を受け、今私は一体どこに来てるのだろうと、まるで日本とは思えず、その場に立ち尽くして気づけば涙が溢れ出ていました。福島県にも祖母が住んでおり、埼玉スーパーアリーナへ避難しているところへ会いにも行きました。１家族、約２畳分を段ボールで区切って毛布を敷き詰めてみんな暮らしていました。埼玉へ帰ってきても、それらの光景は頭から離れることはなく、自分にできることを考え続けていましたが、しかし、被災地のあの光景を見てしまったことが私にとっては大きすぎ、実際東北に行って私にできることは何もない。ボランティアをするなんて、被災した人からしたら、過去に戻ることができるわけでないし、悲しい思いが消えるわけでもない、迷惑だろう、と思って目の前の現実から逃げてしまっていました。せめてこっちで募金をするくらいだと思い、お店に募金箱が置いてあると、必ず募金をしていました。
念願の大学生になり、バタバタと大学生活を充実させていました。年に２回、岩手に帰ると震災の事を思い出し、様子を見に行ったり、祖父、祖母から話を聞きます。２年過ぎたあたりから、私の心は落ち着いて、東北でボランティアをしたいと思うようになりました。そして、２年生が終わるころ、友達からの誘いでこのボランティアツアーに参加させていただきました。

現地へ着くと、震災直後に気仙沼市へ行った時と同じ気持ちになり、バスを降りた時、ここはどこだろう、という気持ちになりました。釜石市には初めて行ったが、こんなにも跡形もなく綺麗に、何もない町になっていて、まるで被災地に来てるとは思えず、時の流れとはすごいなと実感しました。現地で様々な方のお話を聞き、被災者がどのような気持ちでいるかを知った時、正直、やっぱりそうなんだ、と感じました。特に、ボランティアをしていることに対し

て、ありがとうと思えないがありがとうと言うことしかできないという被災者の気持ち、本当にその通りだと思いました。なので、私はそれを聞いたからショックを受けたわけでもなく、ではボランティアをしなくていいやとも思ったわけでもありません。見返りを求めず、自分の自己満足でやることがボランティアだと、そこで、もし、自分がやったことに対して、現地の方の笑顔が見られた時は、それは本当に嬉しいことであって、こちらから、ありがとうと感謝するくらい素敵なことだと思いました。

メディアでしか見てこなかったこと、実際に足を運んだ被災地、釜石へ来て見る風景、どれも「被災地」としての括りは一緒だが、感じ方は全然違いました。それに気づけたこと、このツアーに参加しなければ分からなかったことだと思うので、本当によかったと思います。しかし、もっと早く気づきたかった。もっと早く足を運べばよかったと、行ってみて改めて思いました。海に全く無縁の私たちは特に津波の怖さを知らないからこそ、もっと知って、頭の中に留めておかなければいけないと思います。

現地の方々は表向きだけかもしれないが、しっかり前を向いていたような気がします。私たちのしなければいけないことは、話の中で一番強く言われていた、これから出会うすべての人との出会い、繋がりを大切にすること、自分の身の回りの人を感謝し、大切にすること。今、このように自分がいられる環境があることに感謝したいと思います。そして、絶対に震災の事を忘れないことだと思います。

３日間で、初めてのボランティアで、３年の思いの全ての事を理解し、被災者の気持ちになることは難しかったです。しかし、自分がこの一歩を踏み出したことによって、また気づき、考えることができ、これから行動に繋げることができるかもしれません。どんな形であれ、釜石市に関わってほしいと思う女将さんの気持ちに応えられるよう、私はこれから、学んできたことをたくさん考えていき、東北に関わっていきたいと強く思います。

ありがとうございました。

児童学科３年　五十嵐雪乃　(2014 年４月)

**（1）東日本大震災復興支援ボランティアスタディツアーの実施**

2011 年 8 月より、本学ではボランティアスタディツアーを実施している。今年度は、春と冬のほか、2 年ぶりの夏と、計3回のツアーを実施した。実施にあたっては、岩手県釜石市を拠点に活動する一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校に現地コーディネートの協力と、釜石市の後援を受けている。釜石市とは、2013 年 1 月に連携協定を締結している。

また、ツアーの企画と運営は学内のボランティア団体「復興支援ボランティアチーム【SAVE】」と協働で取り組んだ。

**ｉ）桜プロジェクト3**

釜石市鵜住居地区における生活再建への支援の一環として学生たちの発案による「桜プロジェクト」が 2012 年の初めに立ちあがり、さいたま市北区盆栽町にある「清香園」の協力を受け、「盆栽桜を届ける」企画として実現。旅館「宝来館」の前庭をお借りして、株分け作業を地域の方々と一緒に行った後に、約 200 鉢を贈呈した。また、初めての取り組みとして、2013 年 2 月に仙寿院で行われた津波が来たら高台へ避難することを伝えていく「韋駄天競争」の再現版として、「津波伝承の駆け上がり競争」を仙寿院、釜石応援団の協力のもと実施したほか、これまで鵜住居地区で行ってきた「こどもあそびひろば」の発展形として、「かまっこ★あそびーらんど」を釜石駅近くのシープラザ遊を会場に開催した。

①プロジェクト会議の実施

復興支援ボランティアチーム【SAVE】内でプロジェクトリーダーを選出。そのプロジェクトリーダーとともに、週 1 回程度の企画会議を実施、さらにはツアーのより綿密なプログラム作りを行うために現地の下見を行った。

・企画会議：1 月 31 日（金）、2 月 5 日㈬、12 日㈬、18 日㈫、25 日㈫、3 月 5 日㈬、
　　12 日㈬、25 日㈫、4 月 1 日㈫、8 日㈫、15 日㈫
　　毎回 2 時間程度　計 11 回
・下見：3 月 16 日（日）～18 日（火）

②募金活動の実施

復興支援ボランティアチーム【SAVE】が主体となって、盆栽桜購入のための募金活動を行った。

・募金日時：3 月 26 日㈬、4 月 10 日㈭、11 日㈮
・実施場所：JR 大宮駅西口
・募金総額：16,583 円

③ツアーの実施

・ツアー準備会：2014 年 4 月 15 日（火）
・ツアー日程：2014 年 4 月 18 日（金）夜～4 月 20 日（日）夜
・活動場所：岩手県釜石市鵜住居地区
・宿泊：4/18 車中　4/19 旅館「宝来館」
・活動内容

―事前学習会（大学、4/18 夜）

釜石市出身、現在は上尾で薬剤師をされている小澤嘉代子さんに、釜石の歴史や文化についてお話いただいた後、映像を通じて震災時の学習と鑑賞後の感想共有を行った。

―被災地見学（4/19 午前）
一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校代表伊藤聡氏のガイドで鵜住居地区防災センター跡や、大槌町役場跡をまわった。
―盆栽桜の株分け作業と配付（宝来館星めぐりひろば、4/19 午前）
宝来館の前庭にて、応募いただいた仮設住宅の方々に盆栽桜のプレゼントを行った。その際、2 本株立ちの桜の株分けを来場者と学生がペアとなって実施。また、来場者には桜の花びらカードにメッセージを書いていただき交流の時をもった。
―津波伝承の駆け上がり競争（仙寿院、4/19 午後）
震災の大きな教訓を永く後世につたえるべく、釜石で育った若者を中心に立ち上げた企画を実際に本番のコースを使い体験した。
―「かまっこ★あそびーらんど」の開催（シープラザ遊、4/20 午前）
釜石の子どもたちが思いっきり遊べるイベントを学生企画で実施した。
―活動のふりかえり（4/19 夜、4/20 帰りのバス内）
・参加者数：学生 30 名、教員５名、職員４名、ゲスト１名※　計 40 名

※釜石市との連携を模索するため、平副センター長が監事をしている認定 NPO 法人メイあさかセンター代表が参加された。

④ツアー実施ふりかえり
ツアー実施に向けた企画の段階からツアーの総括として、復興支援ボランティアチーム【SAVE】プロジェクトリーダーとともに振り返りの時をもった。
日時：５月 13 日(火) 17:00～19:30

**ⅱ)よいさっ！プロジェクト**
震災から２年の 2012 年８月に復活した釜石の夏の風物詩である「釜石よいさ」に踊り手として参加することと、春に行ったこどもあそびのイベント「かまっこ★あそびーらんど」の実施をメインとして、今回新たに立ち上がったプロジェクト。文部科学省のスーパープロフェッショナルハイスクール指定校であり、補助事業の中で本学との高大連携も計画されていた埼玉県立常盤高等学校の高校生が参加した。

①プロジェクト会議の実施
復興支援ボランティアチーム【SAVE】内でプロジェクトリーダーを選出。そのプロジェクトリーダーと埼玉県立常盤高等学校教員とともに、週１回程度の企画会議を実施、さらには現地の下見も一緒に行い、ツアーのプログラム作りを行った。

・企画会議：６月 20 日(金)、27 日(金)、７月２日(水)、11 日(金)、18 日(金)、25 日(金)
８月５日(火)　毎回２時間程度　計７回

・下見：７月５日（土）～7日（月）

②ツアーの実施
・ツアー準備会：2014 年７月 15 日（火）
・ツアー日程：2014 年８月８日（金）朝～11 日（月）夜
・活動場所：岩手県釜石市鵜住居地区
・宿泊：8/8 旅館「宝来館」　8/9、10 釜石市民交流センター
・活動内容
　―事前学習会（大学、8/4）
　　映像を通じて震災時の学習と鑑賞後の感想共有を行った後、「釜石よいさ」の踊り練習を行った。
　―参加者交流会（宝来館、8/8 夜）
　　埼玉県立常盤高等学校生徒企画で、交流ゲームと熱中症のレクチャーがあった。
　―被災地見学（三陸鉄道釜石駅～盛駅、大船渡市、唐丹町、鵜住居地区、大槌町、8/9 午前）
　　2011 年３月 11 日に何が起きたのか。今春に復活した三陸鉄道南リアス線の「震災学習列車」に乗車するほかに、甚大な被害のあった大船渡市、唐丹町にある「津波記録石」を見学した。また、一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校代表伊藤聡氏のガイドで鵜住居地区防災センター跡や、大槌町役場跡をまわった。
　―「釜石よいさ」への参加（大町～只越町、8/9 夕方）
　　震災以前から、釜石の夏の風物詩として行われてきた夏祭り「釜石よいさ」。昨年、釜石の若手を中心に復活させたこの祭りを釜石の方々とともに踊らせていただいた。
　―「かまっこ★あそびーらんど」の開催（鈴子町、8/10 終日）
　　釜石の子どもたちが思いっきり遊べるイベントを学生中心に運営。また、埼玉県立常盤高校の企画でハンドマッサージを受けられる“ママカフェコーナー”も実施した。
　―鉄の歴史館の見学（大平町、8/11 午前）
　―活動のふりかえり（8/10 夕方、8/11 帰りのバス内）
・参加者数：聖学院大学　学生 26 名、教員３名、職員４名
　　常盤高校　　学生 10 名、教員３名　　合計 46 名

③ツアー実施ふりかえり
　ツアー実施に向けた企画の段階からツアーの総括として、復興支援ボランティアチーム【SAVE】プロジェクトリーダーと常盤高校教員ともに振り返りの時をもった。
　日時：10 月９日㈭18:30～20:30

**ⅲ）サンタプロジェクト4**
　「お互いにありがとうと言いあえる関係づくり」をテーマに、釜石・大槌郷土料理研究会のお母さんたちに教わる郷土料理づくりや、サンタプロジェクトをはじめた 2011 年から毎年実施している「こどもクリスマス会」を実施するなど、交流をメインとした活動を行った。

①クリスマスカードの製作

2011 年から継続していた、学生・教職員による手作りクリスマスオーナメントやブックマークをお届けする企画を一新し、学生がデザインしたオリジナルのクリスマスカードを製作し、ツアーに参加する学生のメッセージを記入したものを、ツアー中に出会った方々にプレゼントした。

②プロジェクト会議の実施

復興支援ボランティアチーム【SAVE】内でプロジェクトリーダーを選出。そのプロジェクトリーダーとともに、週１回程度、企画会議を開催、さらには現地の下見も行い、ツアーのプログラム作りを行った。

・企画会議：10 月６日（月）、28 日（火）、11 月６日（木）、13 日（木）、18 日（火）、
27 日(木)、12 月２日(火)
の毎回２時間程度　計７回
・下見：11 月３日（月）～5 日（水）

③1 年生必修授業内でのツアーPR 実施

８分のツアー紹介動画を作成し、１年生の必修科目「キリスト教概論」授業を中心に、動画上映とコーディネーターや復興支援ボランティアチーム【SAVE】の学生からツアーの宣伝を行った。

④ツアーの実施

・ツアー準備会：2014 年 11 月 19 日（水）
・ツアー日程：2014 年１２月５日（金）夜～１２月７日（日）夜
・活動場所：岩手県釜石市鵜住居地区ほか
・宿泊：12/5 車中　12/6　釜石市民交流センター
・活動内容
　－事前学習（12/５夜）
　－被災地見学（釜石港周辺、鵜住居地区、唐丹町ほか、12/6 朝）
　　2011 年３月 11 日に何が起きたのか。当日釜石の人々が避難した高台や、甚大な被害があった鵜住居地区、また唐丹町にある「津波記録石」を見学した。
　－現地の方々との郷土料理づくり（橋野町　栗橋公民館、12/6 午前）
　　岩手県の「食の匠」に認定されている方など、料理上手なお母さんに釜石に伝わる郷土料理の作り方を伝授いただいた。後日、レシピにまとめてお母さん方にお送りしたほか、学内で掲示を行った。

―同じ世代のお話を聞く会（橋野町　栗橋公民館、12/6 午後）
釜石の高校生４名ひとりひとりを囲み、震災時のことや釜石の復興について語らいの時をもった。
―※1「こどもクリスマス会」（鵜住居地区　長内集会所、12/7 午前）
鵜住居地区の子どもたちに向けて、クリスマス会を学生企画で実施した。
―※2「漁業ボランティア」（片岸町、12/7 午前）
釜石の漁師、佐々木健一さんのところで、かきの養殖に関わるお手伝いを行った。
―※3「“ワインで乾杯プロジェクト”の応援」（鵜住居地区、12/7 午前）
旅館「宝来館」の岩崎昭子女将の「ラグビーワールドカップ開催の時にワインで乾杯しよう」という発案で始まった、ブドウ苗木の栽培に関わるお手伝いを行った。
―活動のふりかえり（12/6 夜、12/7 帰りのバス内）
※1，2，3は選択活動として実施
・参加者数：学生 40 名、教員７名、職員３名、卒業生（スタッフ）１名　　計 51 名

⑤ツアー実施ふりかえり
ツアー実施に向けた企画の段階からツアーの総括として、復興支援ボランティアチーム【SAVE】プロジェクトリーダーとともに振り返りの時をもった。
日時：2014 年 12 月 16 日（火）

**ⅳ）成果と課題**

・「桜プロジェクト３」は、学生との共同企画に取り組んでから２回目のツアーであったが、これに参加した１年生のうち２名がさっそく次の「よいさっ！プロジェクト」のリーダーに立候補するなど、この１年間、１年生の活躍が目立った。これまで、復興支援に関する企画というと、３，４年生が携わることが多かったが、１・２年が企画のメインを担い、それを３・４年がフォローするというかたちにシフトしつつあり、学生が学生を育てる、という伝統が自然な形で生まれつつある。
・「桜プロジェクト３」で新たに始まった、「津波伝承の駆け上がり競争」（現地名：韋駄天競争）を実施させていただいたことで、釜石の方々がこれから地域の伝統として育て、全国に発信しようとするものを実際に体験し、全速力で避難場所まで駆け上がる競争を通じて、改めて津波への備え、高い場所に避難する大切さを学ぶことができた。
・２年ぶりに行った夏のスタディツアー「よいさっ！プロジェクト」では、釜石の夏の風物詩である「釜石よいさ」エントリーを現地の方に勧めていただき、参加することができた。ボランティアで行くのに踊らせていただいてよいのだろうか、という葛藤を抱きながらも、学生、教職員と釜石の方々の関係性のなかから生まれた出来事として、大変喜ばしいことであった。
・「よいさっ！プロジェクト」では、埼玉県立常盤高校との高大連携プロジェクトとなった。意識の高い高校生の参加により、大学生も触発され、互いに高め合いよりよい活動に繋げることができ

た。当初は、聖学院高校の生徒の参加も予定されていたが、最終的には見送りとなったため、次年度以降は受入れも実現していきたい。

・「サンタプロジェクト４」では、ツアー紹介動画の紹介を中心に授業をまわって丁寧な告知を行ったこともあり、過去最大約 50 名の学生の参加申し込みがあった。（最終的には 40 名定員として、参加できなかった学生には、次回ツアーへの優先参加を約束した。）毎回は難しいが、年に１回程度このような告知方法を継続していきたい。

・東日本大震災から３年が経過し、現地のニーズも大きく変化している。そのため、私たちの活動についても変化が求められており、物資を届けるなどの一方通行の活動から、釜石の方々との交流や現地の文化を学ぶ機会等双方向の活動が増加している。引き続き、現地の支援団体と連携し現地のニーズに即した活動を展開したい。

・ニーズの変化と共に「復興支援ボランティア」という形式をいつまで続けるのがよいかが課題となっている。現地では「震災から３年を経てもはや被災地とは言えない」との声や「震災のことが忘れさられることが不安」との声も聞こえる。現地との関わりを継続しつつ、多様な関わり方（交流や学びの場）についても模索していくことが求められる。

**（2）関連機関との連携**

**ｉ）大学間連携災害ボランティアネットワークへの加盟について**

東日本大震災が契機となり、災害時の大学間連携を目的とした標記ネットワーク（発足：2011 年５月、事務局：東北学院大学）へ 2015 年２月に加盟した。

**ii）聖学院中学高等学校高校生徒会主催「2015.3.11　いま僕たちにできること」への協力について**

高大連携の一環として、聖学院中学高等学校の高校生徒会より、「2015.3.11　いま僕たちにできること」として、東日本大震災を覚える時間を持ちたいという相談を受け、企画や運営について支援を行った。

・日程：2015 年３月 11 日（水）

・内容

-大学での取り組み紹介

-大学生による被災地の現状報告と活動紹介（協力：復興支援ボランティアチーム【SAVE】）

-今、自分たちに何ができるかグループワーク

### (3)学生団体：復興支援ボランティアチーム【SAVE】による復興支援活動

#### ⅰ)活動報告

聖学院大学復興支援ボランティアチーム【SAVE】
代表　こども心理学科３年　藤川　友帆(2014 年度現在)

本団体は、東日本大震災の被災地支援を目的として、東北の方々に笑顔になってもらいたいという想いを胸に津波の被害が大きかった岩手県釜石市を中心に活動している。

被災地の状況は年々変化しており、現在では物的支援などではなく、交流メインのボランティアや心のケアが求められている。また、一方的なボランティアだと重荷に感じてしまうということもあり、双方にメリットのある支援が求められている。

【成果】

去年に引き続きボランティアスタディーツアー「桜プロジェクト」「よいさプロジェクト」「サンタプロジェクト」をボランティア活動支援センターとの共催で実施し、企画運営に取り組んだ。

本大学の学祭「ヴェリタス祭」では、岩手県の郷土お菓子の「がんづき」と「山葡萄ジュース」を販売し、活動報告も模造紙や、DVD などで行った。学生や近隣の方々にも東北を知ってもらう良い機会となった。

また、東北の方々から「被災地ではなく観光地として一度来てもらいたい。」という言葉から、本団体で有志を集い、福島県南相馬市へ視察を兼ねて訪れ、避難区域に指定されてしまった地域を周り現地の方々からお話を聞くことが出来た。それだけではなく、福島のホッキ貝など、美味しい食事を通して被災地としてではなく、「福島」としての良さを実感出来た。

【課題】

本団体は、皆ボランティアに対しての熱い思いがあり、一人一人が個性豊かで明るい団体である。反面、自分の想いや意志が強すぎてしまい、1人ひとりの意見を聞き、まとめることが難しい場合もある。本団体のメンバー1人ひとりが思いやりを持ち、東北の方々のニーズをしっかりとくみ取り、沢山の方に笑顔になってもらえるようなボランティアを今後もしていきたい。

【総括】

震災直後に比べて現在ではボランティア人口が減りつつある。復興は進んでいるが、だからといってボランティアがいらないわけではない。心に傷を負った人、家に帰れない人はまだ大勢いる。今年で震災から4年目を迎えるが、今後も継続されたボランティアや交流が必要であると感じる。ボランティアでなく、観光としてでも東北へ足を運ぶことが東北の活性化や風化を防ぐことにつながるのではないだろうか。復興政策や原発問題は東北の問題として見るのではなく、日本全体の問題として、わずかではあるが東北に関わった者としては考えるべきテーマであると感じた。本団体も自分たちに出来ることを今後も探し続け行動に移していきたい。

#### ⅱ)活動年表

| 日程 | 活動内容 |
|---|---|
| ２０１４年<br>4月10日(木)～11日(金) | 「桜プロジェクト３」実施のための募金活動をJR 大宮駅にて実施 |
| 4月１８日(金)～<br>２０日(日) | ボランティアスタディツアー「桜プロジェクト３」実施 |

| | |
|---|---|
| 8月8日(金)～<br>１１日(月) | ボランティアスタディツアー「よいさっ！プロジェクト」実施 |
| 10月19日(日) | 上尾市大谷地区、コミュニティ推進協議会主催「コミ協フェスタin大谷」にて活動報告 |
| 10月31日(金)<br>～11月1日(土) | 「ヴェリタス祭」（学園祭）にて活動展示と釜石の郷土料理“がんづき”を販売 |
| 11月26日(水) | 女声コーラスグループ「グリューン」主催クリスマスコンサート時に釜石市での「こどもクリスマス会」（サンタプロジェクト４）実施のための募金活動を実施 |
| 12月5日(金)～<br>7日(日) | 「サンタプロジェクト４」実施 |
| 2015年<br>1月13日(火) ～<br>16日(金) | 長野県神城断層地震募金活動を学内にて実施 |
| 3月1日(日) | さいたま市市民活動サポートセンター主催「被災地展示＆サロン」サロン参加 |
| 3月8日(日) | ReVA 復興ボランティアチーム・上尾主催「思いだそう、伝えよう、備えよう」参加 |
| 3月11日(水) | 聖学院高校生徒会主催「今僕たちにできること」にて活動報告 |
| 3月11日(水) | 「桜プロジェクト４」実施のための募金活動を大宮駅にて実施 |

・活動メンバー：17名（2015年３月現在）